

オルテガの社会観と歴史観—少数者と大衆—

長谷川 高 生

Ortega's Views of Society and History
- Minorities and Masses -

Kosei HASEGAWA

神戸医療福祉大学紀要 第15巻 第1号

(平成26年12月)

<原著>

オルテガの社会観と歴史観
— 少数者と大衆 —

長谷川 高 生

Ortega's Views of Society and History
— Minorities and Masses —

KOSEI Hasegawa

In this paper, I try to study Ortega's thoughts of Society and History, referring to "Invertebrate Spain" (published in 1921) and "The Revolt of the Masses" (1930) etc. Spanish philosopher, José Ortega y Gasset offers the idea of sound and wholesome society constituted by the mechanism of exemplariness and obedience. And He also shows the historical theory of perpetual change between period of kitra - process of national integration ruled by distinguished minorities or aristocracies - and period of kali - process of national disintegration dominated by disobedient masses. His views of society and history may suggest what our society ought to be and its future.

Key words : aristocracies and masses, exemplariness and obedience, periods of kitra and kali, integration and disintegration, vital sensibility
貴族と大衆、模範と従順、キトラ期とカーリー期、統合と分裂、生の感性

I はじめに

現代が大衆の時代であると言われて久しい。スペインの哲学者オルテガによれば、現代の大衆社会とは、「平均性」、「同調性」、「凡俗性」、「伝統の無視」、「支配性」、「自己満足」、「自然人性」、「専門主義の野蛮性」などの特徴を有する大衆人に満ち溢れた社会である。こうした大衆社会は近代の文化と文明によって必然的に生み出されたものだが⁽¹⁾、この社会の病理に対してオルテガは近代的社会観を批判して、かくあるべき社会のあり方、社会の歴史的形成過程を呈示しようとするのである。以下、本論文ではオルテガの社会観・歴

史観を概括し検討してみよう。

II オルテガの社会観

オルテガの社会観においては「貴族と大衆の関係」はオルテガ研究者のカーマラやゴラーイスがしばしば言明するように、決定的である。カーマラに言わせれば、「エリートと大衆との間の区分の役割はオルテガ社会理論の全体のなかでは、第二位的というものでは決してなく、いくらその重要性を誇張してもしすぎるものではない」、「オルテガの全社会学はこの区分に依拠しており、この区分を通してその全的・根本的意義を獲得するので

ある」⁽²⁾。そこで以下、こうした観点に立って、オルテガが社会と歴史について述べた2つの代表的著作、つまり自らの母国スペインの歴史的・社会的病理を分析・解明した『無脊椎のスペイン』⁽³⁾と、この著の視点をヨーロッパ文明にまで拡大して現代文明の病根を探索した『大衆の反逆』のうちおもに前著を参考にして、オルテガの社会観を検討してみよう。

〔1〕「近代的社会観」批判—「かくあらねばならぬ」の魔術への批判—

オルテガは自らの社会観を述べるときまず、彼自身の時代に流通している近代的な社会観を批判する。近代的な社会観の片面的で硬直した法的・道徳的な意識を非難して、あるべき現実を体現する社会観を呈示しようとするのであるが、その際、社会における普遍的な現象として「階層」の観念の重要性を強調し、以下のように説明している。

(1) 階層の観念

オルテガが歴史上の社会に関していかなる観念を持っていたかについて考察しようとするとき、まず第一に社会の基本的構成、構造的基礎としての「階層」概念についての彼の見解を考察することが非常に重要であり、かつ理解を容易にすると思われる。彼は「階層の観念」が近代思想に毒された現代人の精神状態とは真っ向から対立することを熟知しつつも、それについて次のように述べている。「階層の観念」は、「深遠で正鵠を射た思想である」と。つまり階層というものはその中で、「たいへん異質で、異なった価値をもった二つの要素が結びついて」おり、その要素の1つは階層というものが、「集団的機能」を果たす階級制を本質として持っていることである。すなわち、「社会が諸階層（カースト）へと組織化されるというこの考え」は、「社会というものが独自の構造をそなえており、

「この構造は、われわれが好むと好まざるとにかかわらず、客観的には機能の階級制から成っているとの確信がある」ことを意味する。オルテガに言わせれば、「あらゆる社会に、集団的機能の階級的体系からなる本質的な構造が存在することを知らないこと」は、「天体の軌道体系を変えようと欲したり、人間には頭と足、地球には北と南、角錐には頂点と底辺があることを認めようとしないのに劣らさなければいけない」ことなのである。またもう1つの要素は階層が、それに属する人間が異なる機能を果たすときの「基準」を保持していることである。つまり階層は「どのような人がこれらの相異なる機能を果たさなければならぬかを決定する際の基準」を本質的に有しているのである⁽⁴⁾。

かくして「古代インド人」は「自然の魔術的解釈」の支配のもと、「ある機能を果たす能力は神秘に満ちた恩寵のごとく、血筋に強く結びついて」、「戦士の子供だけがりっぱな戦士に、農夫の子供だけがりっぱな農夫になれる」と考えたのである。それゆえ「人は家系の原理、血統の相続によっていろいろな社会階層に配属」された。これに対して「近代の政治思想は、記号は逆であるが、アジアの靈感に劣らず神秘的な靈感によって導かれて」、そこでは人びとは「あたかも、社会がそれ自身不変の鍵を持たず、われわれの希望にしたがってその構造を受け入れようと待ち構えているかのように」、「われわれにかくあらねばならぬと思えるように社会を作り上げようと努めている」。こうした近現代の偽りに満ちた社会思想に対してオルテガは、「現代のすべてのユートピア思想は魔術である」と宣告する。そして彼は「社会はどうあらねばならぬかを命ずるときのカントの身ぶり」が、すべての人にとってばかげた魔術的動作と映るようになるまでにはたいした時間はか

からないだろう」と予言するのである⁽⁵⁾。

(2) 指導する者と指導される者－貴族と大衆－

では、オルテガの言うこの社会階層は歴史社会の現実においては、いかなる人間、いかなる人種によって占められるのであろうか。彼によれば「社会の本源的な事実、それが幾人かの人間の単なる集合ではなく、その集まりの中に直ちに分割が生じること」であり、「社会に関して最も基本的な事実、それが指導される者と、そうした人間集団を指導する者に分かれている組織」であるということなのである。このことは、「ある人びとには指導能力が、他の人びとには指導されるにまかせるといふある種の心の才を予想」させるものである。要するにオルテガによれば、「多数集団の上に働きかける少数者のいないところ、少数者の影響を受け入れることを知っている多数集団のいないところでは、社会は存在しないか、ほとんどないに等しい」のである。しかもここでは、「政治的意味での指導者、被指導者、すなわち統治者、被統治者だけが問題になっているのではなく、それが主に問題になっているのではない」、「政治的なものは社会的なもの的一面でしかない」のである⁽⁶⁾。オルテガが別の個所で歴史上の国家について言明しているように、「国家という社会がとりうる法的形態は、人間の考えうる限り民主主義的であったり、共産主義的でさえありうる」が、「実際に作用している超法律的構造は、つねに少数者が大衆に及ぼすダイナミックな活動」なのである。すなわち、「国家とは、選ばれた少数者によって組織され、構成された、人間集団」であり、「われわれの政治信条がいかなるものであろうとも、われわれはこの真実を認めなければならない」のであり、「これは政治問題が動いている地平よりもはるかに深い歴史的現実の地層にか

かわる事柄」なのである。この例証をオルテガは、人間の最も基本的な社会現象である「会話」という場面にも求めている⁽⁷⁾。

指導する者と指導される者というこの両概念をオルテガの別の言葉で言えば、「貴族と大衆」ということになる。これについても彼は「貴族と大衆という両概念は、人間相互間のあらゆる形の関係に関係しているものと解すべき」ものであり、これは「人間共存のあらゆる面に作用している」ものであると説明している。両概念の影響は「その影響が最も微々たるものであると考えられているところこそ」、「最も決定的、かつ本源的」なのである。それゆえ「すぐれた少数者に対する精神的反逆が政治にまで達したときには、すでに社会組織全体を通過してきている」と考えられるのである⁽⁸⁾。

(3) 18・19世紀のユートピア思想批判

こうしたオルテガの階層論や、貴族と大衆の両概念からすれば、近代の政治思想や18・19世紀のユートピア思想は鋭く批判されることになる。オルテガによれば、近代の政治思想、現代のユートピア思想においては「政治機構は、道徳的もしくは正義感的観点からみて貴族政治的でなければならぬとか、いやそうあつてはならぬとかいうこと以外は問題にされていない」。そこでは「貴族と大衆との間の関係の問題」は、「一般に倫理的もしくは法律的パースペクティブの下で提起され」、「あらかじめ現実にあるところのもの、つまり各現実には不可避的な条件を分析せず」、「直ちに物事はどうあらねばならぬかに関して考えを述べようとする」。この「ひどく安易な精神態度」が、『進歩主義者』、『急進論者』、さらには『自由主義的』、『民主主義的』と呼ばれているところのほとんどすべての精神に特徴的な悪癖なのである。オルテガによれば、「魅力的な外貌を持った図式的な社会組

織を描くのはたいへんやさしいこと」であり、そのためには、「われわれの願望が空想の中で実現されたと考えてみるなり、悟性を純粋な弁証法的発展に委ね、われわれに欠点と思えるものをすべて取り除いた、多角形とか十二面体のような形の上での完全さをそなえた社会組織を幾何学的に構想してみるだけでじゅうぶん」なのである。しかし、このような、「現実的なものを抽象的に望ましいもので置換する」のは、「幼稚さの印」である。オルテガに言わせれば、「何かが実現しうるものであるためには、それが望ましいというだけではふじゅうぶん」であり、さらに「肝心なことは、ある物がほんとうに望ましいものであるには、それがわれわれに望ましく思えるだけではふじゅうぶんだということ」である⁽⁹⁾。

オルテガは「社会組織の倫理的もしくは法律的完璧さ」を意味する「『かくあらねばならぬ』というこの規範的表現」は「その道徳的な意味だけに限られており」、「社会と人間に関する問題には道徳性や正義とはまったく関係のない、他の多くのことがふくまれているのがほとんど忘れ去られている」と指摘している。彼によれば、「十八世紀以来『進歩主義』の発明者が魔術のように歴史の上に働かせようとしてきたこの『かくあらねばならぬ』は、さしあたり、部分的な『かくあらねばならぬ』」なのである。すなわち「最も完全な社会の型（タイプ）が丹精をこめて作られるとき、そこにはただ倫理的もしくは法的な改良だけが織りこまれ、それ以外の、道徳に関係のないすべての問題は除外されている」のである。しかしオルテガの考察するところ、「実際には、道徳に関係のないそのような問題こそが社会の存在にとっては最高度の重要性を持っている」のである。「それら諸問題の解決のために、倫理的もしくは法的

意義は持たないにしろ」、「農民には畑の理想が、牧畜業者には馬の理想が、医者には身体の理想」があるように、「また別の一つの規範、一つの『かくあらねばならぬ』がある」とオルテガは考えているのである。すなわち、「道徳や法律には無関係のこれらの理想」は、「以上の事物が最も完全な状態にあるときのイメージそのものなのだが、そこからこの畑が、この馬が、この人体がどうあらねばならぬかを表わす規範が出てくる」のである⁽¹⁰⁾。

したがってオルテガの見るところ、「道徳家もしくは法律家の『かくあらねばならぬ』は部分的であり、断片的であり、ふじゅうぶんな『かくあらねばならぬ』」である。それと同時にオルテガは、「規範を与える際に、その完全さを定義し、強制しようとしている対象が、完全な条件の下では実際にはどうであるのかを忘れていたような倫理」は、「疑わしいもの」であり信用できないと言う。オルテガの見解では、「ただ可能でありうるものだけが、あらねばならないと言える」のであり、そして「可能でありうるものは、現実にある諸条件の範囲内を動くものだけ」である。それゆえオルテガが言明するところ、「ある事物の理想、別の言い方をすれば、ある事物があらねばならぬ姿は、現実の構造を取り替えることにあるのではなく、むしろ逆に、現実の構造を完成させるところにある」。「事物がいかにあらねばならぬかに関するあらゆる正しい判決は、その事物の実体についての熱心な観察を前提とする」。こうしたオルテガの見解からすれば、「『倫理的』もしくは『法的』観点からは、社会の理想は構成されえない」のである⁽¹¹⁾。

以上が、「十八、十九世紀の犯した錯誤」の理由であり、「道徳と法律だけをもってしては、われわれの抱く社会のユートピアがまったく正しいと保証することすらできな

い」のである¹²⁾。それゆえ18・19世紀のユートピア思想は「位階の区別があるのは正しくない」と軽々しく推論してきたけれども、オルテガからすれば、「もし位階がなければ、社会は生まれることも存続することもできない」のである。かくしてオルテガは社会の有様について次のように言明する。「社会は正しくあるよりも前に健全でなければならない、すなわち社会でなければならない」、それゆえ、『かくあらねばならぬ』ところに関する図式を考え出す倫理や法律である以前に、良識は実際にあるところを直観し、その上で語るべきではない」と。したがって、オルテガの主張からすれば、「社会が貴族の参加によって構成されるべきかいなかと議論するのは、まったくの暇つぶし」なのである。この「問題は、人類の歴史の最初の日からすでに解決」されており、「貴族のいない、つまりすぐれた少数者のいない社会は社会ではないのである」。オルテガは「数々の魔術的倫理には背を向け、ただ一つの承認しうる倫理」として、「今から二十六世紀前に」生きていた古代ギリシアの詩人「ピンダロス」を評価し、彼の「有名な『汝そのものであれ』という命令」を採択する。すなわち、「われわれは人間としての本性から不完全なものではあるが、その範囲内で完全なものとなる」とオルテガは主張しているのである。というのは「もしわれわれが現実を見ることを知っていれば、あらゆる現実はいかにその欠点と規範を、その罪業と当為を示すであろう」からである¹³⁾。

〔2〕オルテガの社会観－貴族と大衆の関係－

以上からしてオルテガの社会学には「貴族と大衆」とが絶対的に存在しているのである。すなわち「変則状態にあるものを除き、あらゆる階級や集団には、凡俗な一般大衆と卓越

した少数者とがいる」のである。では以上の貴族と大衆とは社会のなかでいかなる関係を形成・保持しているのだろうか。

(1) 模範性と従順

通常の「粗雑な社会学」は、「大衆を経済的に劣等な階級の総体、すなわち庶民と解し、選ばれた少数者を社会の最上層階級と解」することによって、「大衆と選ばれた少数者の概念を歪めている」。これに対してオルテガの見解では、「健全な社会」においては、「上層階級が真にそうである限り、下層階級に比べてより力に満ちた、選り抜かれた少数者を擁している」し、逆に「社会の衰退」の場合は、「ほかでもなく上層階級が墮落し、ほとんど完全に凡俗な大衆に成り下がってしまう」のである。したがってオルテガのいう「貴族」とはこの言葉によって一般的に考えられている世襲的なものではなく、精神的・人間的な意味での貴族を意味しているのである。これについては彼自身も、「貴族について語る時、一般に不注意から貴族と呼ばれているものに言及しているのだととられるほど、私の意図とかけ離れたものはない」と言明しているのである¹⁴⁾。さらに「歴史は根本的に貴族主義的であるという解釈の支持者として知られている」オルテガは、次のようにも述べているのである。「私は人間社会は好むと好まざるとにかかわらず、その本質自体からつねに貴族的であると言ってきたし、今でも日一日と、ますますその確信を強めている。人間社会は、それが貴族的である程度に応じて社会でありえ、貴族的でなくなる程度に応じて社会であることをやめてしまうほど、貴族的なものである」と¹⁵⁾。

そして、こうした貴族、すなわち選ばれた少数者と大衆とは社会のなかで相互作用している、というのがオルテガの基本的認識である。すなわち、オルテガは「あらゆる社会

の基本的事実であり、善ならびに悪への発展の動因であると考えている大衆と選ばれた少数者の間の相互作用について明確な直観を得」ようとするのである¹⁶⁾。そこでオルテガは次のような社会生活上の具体的な場面を例に挙げて、この相互作用の有り様に接近していく。

「幾人かの人間が集まると、その中の一人が普通の人よりずっと魅力的で、表情豊かであり、その場にふさわしい表情を作ったり、あるいは意味をよく映している言葉をより美しく発したり、あるいはまた、より鋭く光彩を放つ考えを述べたり、生の一場面を前にしてよりの確で、りっぱな、気品があって、正当と思われる感情的反応を示すということになる。もしそこに居合わせた者が正常な気質の持ち主であれば、あのような表情をしてみたり、あのような言葉を発したり、あのような感情を抱いてみたいという欲望が彼の心の中に自然に湧いてくるのを感じるだろう」¹⁷⁾。

かくして、ある人間がこのような「あの人のようになりたい」という場合、オルテガは模倣と同化の二つの場合を考えている。「模倣の場合は、いわばわれわれは、われわれの真の人格の外にあって行動し、われわれ自身に外面的な仮面を作り上げている」。反対に、「われわれの前に現われる模範的人物に同化する場合には、われわれの全人格は、この人物の存在様式に向けられ、われわれが敬服している模範に従い、ほんとうにわれわれの本質を変える心づもりになる」。要するに、「この人物の模範性を模範性として感ずるのであり、われわれはこの模範に対して従順さを感じるわけである」。後者の場合においてこそ、「われわれが正常な感受性をそなえているなら、われわれよりすぐれていたり、われわれ

より何かをうまくやる人を見たとき、われわれは仮にはではなくほんとうに、その人のようになりたい、その人のやるようにものごとをやったのけたいと願う」のである。そしてオルテガによれば、この「模範性と従順」こそが、「あらゆる社会を創り出す基本的メカニズム」なのである。「少数者の模範性は多数者の従順さの中で実を結ぶ」のである。その結果、「模範性は広まり、劣った者はすぐれた者と同じ方向で完成に近づく」のである。彼に言わせれば、「最善のものに熱中する、一時的な完全さに心を奪われるにまかせる、典型すなわち模範的な型に従順であるというこの能力は、人間が動物的存在としての自己の上につけ加えた精神機能であり、これが、他の生物の相対的固定化とは異なる人類の進歩をもたらしたもの」なのである¹⁸⁾。

では、この模範性と従順のメカニズムは歴史上においては、どのように作用してきたのか。オルテガは「歴史的問題のような事実問題」に「形而上学的解釈を持ち込む歴史の唯物論的解釈」や、より一般的に「功利主義的解釈」を持ち込まず、この模範と従順の相互作用の見解を適用する。すなわち、「あらゆる人間社会では、最も原始的な社会においても、その成員はつねにあらゆる行為が二とおりに、つまりより良くかより悪くかの二とおりに行なわれうること、また、生き方やあり方に規範が、すなわち模範的方法があることに気づいて」おり、「このよう規範への従順そのものが、社会そのものである共存の存続を可能に」し、これに対して「不従順、換言すればある種の規範的行動型への不服従は成員の四散、つまり社会の解体をひき起こす」のである。結局オルテガによれば、「このよう規範は、もとをただせばある個人の模範的行為であった」のである。したがって彼の見解では、「分離的な時代に教育を受けた」「わ

れわれの精神状態とまっこうから対立する」ゆえ「社会を形成させる精神状態を思い浮かべるのはかなり骨の折れること」なのだが、「人びとを結び付けて永続的集団を作らせていたのは、権力でも有用性でもなく、個々の場合に最も完璧な人が他の人びとに対して有していた魅力的な力」であったのである。その例証としてオルテガはとくに原初の人間社会に注目して、「民族や部族や遊牧集団の形成に関する最古の伝説や神話」上の「傑出した、驚異的才能をそなえた人物や社会集団の父」の存在を挙げる。このときオルテガは「一時期集団に影響を及ぼした実在の人物がその後、後世の人びとにより理想化され模範化されたのだ」と説明する「いかにも十九世紀的なばかげた神人説」を拒絶して、「もしそうした人物が生存中に熱狂を呼び起こしていなかったり、実際に彼が理想や、典型でなかったら、そのような後世の理想化はありえない」し、「このような人物が存命中に影響するところ大だったから、人びとは彼らを模範としたのではなく、反対に、彼らがとりもなおさず模範だったがゆえに大いに影響を及ぼしたのであり、社会形成の中心となったのである」と言明するのである。さらにオルテガによれば「四方を壁に囲まれた狭い範囲で展開する」「家族社会」においても、「父母は子供たちの生来の模範であり」、「夫婦はお互いが理想」なのである。それゆえお互いの「影響がすっかりなくなったとき家族は瓦解」してしまう、と彼は指摘するのである⁽⁹⁾。

(2) 社会形成の模範的人物

では、こうした社会形成の模範となる人間とはいかなる人物なのか。オルテガは「社会を生み出す根源的な力」は「政治的もしくは経済的な性格のものではなかった」と言う。すなわち、「権力はその強力な手段をもってしても」、さらにまた「有用性はその利益の

メカニズムをもってしても」、「以前からある集団の中においてしか社会を創り出すことができなかった」のである。オルテガは「祭典的、スポーツ的、宗教的性格を持っていた」「原始社会」においては、「少数の者がもつ美的、魔術的、もしくはたんに生的な模範性が従順な人びとを引きつけた」と指摘している。ここでは、「一人の人間が他の人間に及ぼす影響すなわち權威 *cracia* は、その人を取り巻く熱中者に、典型あるいは模範が呼び起こすあの自然な感動を呼び起こさなければ、それは、はかない、二次的な影響」でしかなく、「この精神的引力、つまり一つの模範が背後に従順な者を引き連れている、一種の精神的重力の法則に基づかない貴族政治 *aristocracia*」は、現代においても過去においても存在していないのである。それゆえ「社会は命令者と服従者に分かれる」のだが、このとき「服従は、服従者が命令者に心からの敬意をもって命令権を授けた度合に応じてしか、正常かつ永続的でありえない」のである⁽¹⁰⁾。それゆえ「服従は模範への従順さを前提」とし、「この関係を逆にしてはならない」。「人が命令に従うのは模範に従順であるからであって、命令権は模範性の付属物でしかない」のである。かくして「一人の卓越した人物が、その模範性のゆえに、従順な大衆からある公的權威を与えられた」ような場合は、「この人が死ぬと彼の權威は社会の空隙として、一種の所有主不在の形で残る」。「この空席は他の人があるときには十全な資格をもって、またときにはその資格なしに占める」。結局、「この權威の名声はこの權威を司った人の思い出が残っているかぎり続く」わけである⁽¹¹⁾。

オルテガは以上からして、「われわれは結局のところ社会を、一つの模範とそれに従順な人びとが形作る動的な精神的統一体と定義するようになる」と言明する。そしてこのこ

とは、「社会がそれ自体、誕生のときからすでに完成した機関であることを示している」と言う。彼によれば、「ある人間に従順であろうと感ずることは、その人間との共同生活を営もうと望ませ、その人に見習って生きようとさせる」。ということは、これは「模範に従って向上しようとする」ことを意味する。つまり、「社会のなかに残っているある種の模範に近づこうと駆り立てる力は、社会が真に社会である限り持っているもの」であると、オルテガは主張するのである。さらに「このような最高の人物の卓越性には実にさまざまな種類」があり、「個々の階級、集団の中では、その階級や集団独自の資質が極致に達しているある種の人びとが目立つ」と指摘している。そして、国家という組織についてもオルテガは、「もし国家が一種類の卓越さだけに気をとられているようでは、その歴史的な必要事を満たすことはできないだろう」と忠告する。「すぐれた学者や芸術家とともに、模範的軍人や完璧な産業人、手本となる労働者、さらには気のきいた社交家さえも必要」なのであり、その上、「それ以上に傑出した女性を必要」とすると言うのである²³。オルテガによれば、こうした模範的な人物に従順であろうとする、「社会的共存の原理と考えられている模範性-従順のメカニズム」は、「社会を創り出し、それをささえている精神的力が何であるかを示唆するという長所」だけでなく、同時に「衰退現象を明らかにし、国家の病理を解明する長所も持っている」のである。つまり、「一つの国家が何世紀もの間ひどい衰弱を続けている場合、つねにその原因は、その国に模範的人物がいないか、あるいは大衆が不従順かのどちらか」であり、「極端な場合には、両者が同時に起こる」のである。以上からしてオルテガは、模範性と従順、すなわち「貴族と大衆の間の関係の問題が、あら

ゆる倫理的ならびに法的形式主義」に「先立つもの」であり、それはまさしく「社会事象の根本である」と主張するのである²³。

かくしてオルテガの洞察するところ、「衰退していない民族」は、「通常その成員の総数に比例して何人かのすぐれた人物を生み出す」のであり、そうした「人物のなかに知的、道徳的、そして一般的には、生の能力が最高度に現われる」のである。それゆえ「より洗練された民族」では、「粗野な民族におけるよりも卓越者の現われる率が高い」のである。すなわち逆に言えば、彼の見るところ、「ある民族がすぐれた人物をより多く持つとき、その民族は他の民族より優秀」なのである。反対に、「基本的種類の卓越性の幾つかが長い間欠ける」場合、「何世紀にもわたる国民生活の発展の中で最後にはその欠如が感じられるようになる」。この場合、「民族は何らかの方向に傾くであろうし、このびっこの現象は終局的には完全な没落をもたらすだろう」とオルテガは予言している。というのは、彼によれば、「あらゆる国家には、その国家の存否をかけてじゅうぶんに果たさねばならない、高度の生の作用の最低限というものがある」のであり、「国民の中につねにそのような働きを行なうに模範的な才能をそなえた者がいる必要がある」のである。「もしそういう者がいなければ、この機能の水準は、国家にとり不可欠な最低線を割るほどにまで低下していく」とオルテガは警告している。たとえば「知的活動」を例にとれば、「近代国家はもしその知的機能——現実理解、学問、技術、行政——をさらに向上させ、細分化し、精細にすることを知らなければ、ある程度充実して生きることができないのは明らかである」。それゆえ、「もし幾世代かにわたって、他の人びとに音程や規範の役割を果たし、その時どきの諸問題の解決に必要とされる頭脳

の明晰さの度合を感じ取るような力強い知性の持ち主が欠けるか減少する」ような場合、「大衆は最小努力の法則により、ますます厳密さを欠いた思考をするようになり、知識欲や思想や観点の総数は急激に減少し、ついには時代の必要上要求されている水準以下にまで下が」り、「知的墮落に陥った愚かな民族」が出現することになる、とオルテガは警鐘を鳴らすのである²⁴⁾。

Ⅲ オルテガの歴史観

以上のごとき社会観を展開するオルテガは、いかなる歴史観を有していたのであろうか。彼は歴史のなかに、社会を纏め上げ方向づける統合の時代とその社会を解体に導く分裂の時代を観る。

〔1〕 統合と分裂—キトラ期とカーリー期—

すなわちオルテガは社会を構成する貴族と大衆のうち、貴族の少数者が大衆を魅了し社会の形成に向かう統合期と大衆が社会の全面に溢れしかも少数者に不服従である社会の衰退期とを歴史に見出している。彼は前者を歴史の「キトラ期」、後者を「カーリー期」と名付けている。

(1) キトラ期とカーリー期

オルテガによれば、「歴史には二種類の時代が永遠に交互に現われ続ける」。その一つは「貴族階級形成とそれに伴う社会形成の時期」であり、他は「この貴族階級の衰退とそれに伴う社会解体の時期」である。「古代インド人の間では、それぞれ『キトラ』kitra期、『カーリー』kali期と呼ばれており、この二つは、永続できる限りの期間を周期として交互に繰り返す」。「『カーリー』期には階層制度が壊される」。「スドラ sudra すなわち下層階級がのし上がってくる」。なぜなら、「梵

天 Brahma が眠りに陥ってしまったからである。そのときには、ヴィシシュヌ Vishnú がシバ Siva の恐ろしい姿に身を変えて、既存のあらゆる形式を破壊してしまう」。やがて「神々の黄昏が地平線を青白く照らす。最後に梵天が目ざめ、情け深い神ヴィシシュヌの仮面をかぶって再び宇宙を創り、新しい『キトラ』期の夜明けをもたらす」のである²⁵⁾。

(2) 歴史の解釈—個人主義的解釈と集団主義的解釈—

こうした社会解体のカーリー期と社会形成のキトラ期とによる歴史の解釈を、オルテガは1923年に刊行した『現代の課題』で「世代概念」について述べるとき、「歴史的現実」に対する「集団主義的解釈と個人主義的解釈との二様の解釈」としてさらに一般化している。すなわち、集団主義的解釈とは「歴史的過程は事実上ばく然とした大衆の事業である」とみなし、個人主義的解釈は、「歴史の形成者はおもっぱら個人である」とみる。後者の立場からすれば、「個人の人格における能動性、創造性がきわめて明白な事実である以上、集団主義的歴史観を受け入れることはでき」ない。「大衆人間は単に受容的である」。すなわち「彼らのすることは進取的、独創的活力のある人間に対し、自分たちの好意あるいは抵抗を示すだけである」。他方、前者の立場からすれば、「孤立した個人というものは一つの抽象」である。しかし真実は、「歴史的な生活は共同生活である」。「すぐれた個人の生は、まさしく、大衆に広汎な影響を与えるところに認められ」、「『偉人』は大衆から切り離すことのできないものなのである」。したがってオルテガ自身は両者の統合的立場を主張するのである。彼によれば、「歴史的過程における本質的な二元性」、すなわち、「人類はそのあらゆる発展段階においていつでも、より有力な人間が——その力がどうい

形をとっていようととも——大衆に作用を及ぼし、彼らにあるはっきりした形態を与えるという一つの作用構造をとっている」。そして、「このことは、卓越した個人と平凡な民衆との間に、基盤的なある共涯のあることを暗示している」のである。オルテガの考察するところ、「歴史はその主要本文の縁（へり）に、そういう『法外な人間』の伝記を注記しなければ」ならないのである。「他のすべての生物的学科のように歴史もまた、型はずれのものための一部門、奇形学を持っている」のである²⁶。

(3) 生の感性－世代という形式－

ところでオルテガによれば、人間社会のあらゆる分野に諸変化をもたらす「歴史的現象なるもの」は、「より深いところにある別の現象に依存しており、かつ後者は前者から独立したものである」。「歴史的現実の胴体」は、「完全に位階づけられた解剖組織をもっており、諸事実のさまざまな種類の中に、従属、依存の秩序関係がある」のである。したがって、「産業や政治の世界の変化は深いものではない。それらの諸変化は、同時代のもつ道徳や美的情操における観念とか好みとかに依存している」。さらに、「イデオロギーや趣味や徳性も、それはそれでまた、生の実存の中に起きてくる根本感情、不可分の一全体における根本的な生感情の結果ないし表出以上のものではない」。「『生の感性』 *sensibilidad vital*」とオルテガが呼ぶものこそが、「歴史における原初的現象」なのである。そして「それが、一時期を理解しようとするとき、まずわれわれが明らかにしなければならない最初のもの」なのである²⁷。それゆえ、この「生の感性の変化」こそが、「歴史において決定的な意味をもつもの」なのである。そして「生の感性の変化」は「世代の形式をとって現れる」のである²⁸。

オルテガによれば、「世代というものは少数のすぐれた人間のことでなければ、また単に多数の人間のことでない。世代とは統合された一つの別の社会体」である。それは「選良の少数者とすでに生の軌道が決定され生存圏へ投げ入れられている大量の多数者との両者からなっている」。「世代は大衆と個人との動態的（ダイナミック）な合体」であり、そしてこれが「歴史における最も重要な概念」である。言うなれば、それは「歴史が回転する枢軸」なのである。

オルテガの世代論については筆者は別稿で論じたので²⁹、ここでは詳細は割愛するとして、以上の少数者によって統合されるキトラ期と大衆が反逆する分裂のカーリー期とによって構成される歴史過程をオルテガの見解に従って、古代ローマ史を題材にして以下において辿ってみよう。

〔2〕古代ローマ史

古代ローマ史に関しては、オルテガはローマ民族は「その歴史がわれわれに知られている数多くの民族の中にあって」、「われわれが見守る前でその生の周期全体を展開してみせてくれる唯一の民族」であると言っている。つまり「ローマ帝国は、国家という有機体が描く完全な軌跡について」、「その誕生と消滅に立ち会うことができる」「われわれが知っている唯一の例」なのである。

(1) 古代ローマ史

それゆえオルテガによればわれわれは、「粗野で四角い *quadrata* ローマが、世界全域にわたってはなばなく発展していく後を追うこともできれば、その後で、巨大なだけにいっそう哀れな廃墟と化するのを目撃することもできる」のである。他の民族の場合については、「彼らの描く生の光景は断片的である」。つまり、われわれは「そうした民族が誕生すると

ころを見ていないか、さもなければ、まだその死滅するところに立ち会っていないか」である。オルテガに言わせれば、「このことは、歴史という言葉を経験的な厳密さで使った場合、今日までのところわずか一つの歴史しか構築されえなかった事情を説明している」のである。「その唯一の歴史がローマ史」ということなのである⁸⁰⁾。

オルテガは『ローマ史』をものにしたモムゼンが「予備的な章が幾つか続いた後で」、「ローマのかずかずの運命を述べ始めようとして筆を執る」、その一瞬の言葉に注目する⁸¹⁾。すなわち、「死に瀕した人の意識の前を彼の全生涯が流れるように、いかなるローマ人よりもローマ帝国の生を生きた」モムゼンは、「ローマの出来事の織りなす色彩豊かな一筋の帯」、その「劇的な場面がめくるめく速さで映し出される」のを見つつ、「直観というあのすばらしい宝」によって「すべての国家の歴史、なかんずく、ローマ帝国のそれは統合の一大体系である」と書き記したのである。この「統合」という言葉をオルテガは物理学の「運動」という概念と比較考量してその重要性を強調している。つまりオルテガに言わせれば、この「統合」という「言葉」は、『物理的現実には究極的には運動の方程式よりなる』という言葉が物理学について持つのと、まったく同じような価値を歴史に対して持つ一つの原理」である。「熱、光、抵抗その他、自然においては、運動とは思えないすべてのものが実際には運動」なのであり、「われわれがある現象を理解もしくは説明し終えるのは、われわれがその現象の内的表出、つまり、その運動様式を発見したときである」。したがって、「もし運動が物理学で果たしている役割を、歴史では統合の過程が果たしているとすれば」、歴史における「すべては、われわれが統合とは何かについて明晰な概念を持

つかどうかにかかってくる」とオルテガは言うのである⁸²⁾。

オルテガのいう「歴史上の統合」とは、家族からの拡大のような「原初の中核の拡張」ではなく、ローマの発展過程のごとき「相異なる二つの共同体がより高次の単位で結合」することを意味する。オルテガの見るところ「政治社会や国家の起源を家族の拡大」の中に見出すことは間違いであり、「家族は社会の細胞であるとか、または、国家は膨張した家族のようなものであるという考えは、歴史学、社会学、政治学、その他多くの面での進歩の妨げとなっている」と彼は指摘している。オルテガの考察するところ、「家族は国家の母体であるどころか、いろいろな意味で、それとはまったく反対のもの」である。家族はまず第一に、「国家より遅れて形成されたもの」であり、第二に、「国家に対して反発的性格を持っている」のである⁸³⁾。

歴史上の「統合」の例としてオルテガは「ローマが発展した際の決定的な諸段階」を挙げる。すなわち古代ローマは「原初のローマ、二つのローマ、ラテン連合、中部イタリア統一、植民地帝国の順序」で「みごとな上昇線」を示すのである。つまり①「ローマは最初、パラティノ山にあった自由市と近くの七つの高台とから成っていた。これがパラティノ・ローマであり、七つの山 Septimontium つまり山のローマ」である。そのあと、②「パラティノ山にあった自由市と近くの七つの高台とから成っていた」「パラティノ・ローマ」、「七つの山 Septimontium つまり山のローマ」と、「キリナレの丘にあって境界を接していたもう一つの自由市」とが合体し、「それ以後はローマが二つ」になり、「山のローマと丘のローマ」が形成された。それゆえ「すでにこのローマの統合の初期段階からして拡張のイメージは

排除されている。ローマ全体はパラティノ・ローマの発展ではなく、相異なる二つの共同体がより高次の単位で結合したものである。しかも「このパラティノ・キリナレ系ローマ」は、「同じラテン民族からなる他の多くの似かよった集落の間にあったが、それらの集落とはなんらの政治的交渉を持っていなかった」。以後ローマは、「同種族のラティウムの諸自由市を従わせなければならなかった」が、「そのときに使われた方法は、その数世紀後にセルティベロ人、ガリア人、ゲルマン人、ギリシア人、スキタイ人、シリア人といった、自分と異なった種族をローマ帝国に組み入れるため用いるようになった方法とまったく同じ」であった⁶⁴。オルテガによれば、「国家という単位を血の同一性に基づくと考えたり、あるいはまた、その逆を考えるのは誤りである」。「種族的相違は歴史的統合を排除するどころか、あらゆる大国の萌芽期においては、その国家の特質を成していたものを強調しているのである」。さらに、③「ローマはラティウムの自分の姉妹たちの一つの社会集団、つまり統一連合体を作り上げるよう強制した」が、それが「ラテン連合 foedus latinum——ラテン条約——」であり、これは「進行しつつある統合の第二期」に当たる。「その第一歩は別種族であり、ラティウムの領土と境を接していたエトルリア人、サムニウム人を支配する」ことであった。これが達せられると、④「中部イタリアの世界はもはや歴史的に有機的な統一体」となっていた。そしてその少し後には、⑤「驚くほど調子を高め crescendo、コーカサスから大西洋に至る間に住んでいたその他すべての民族をイタリアの胴体に合体し、ローマ帝国という巨大な機構を形成」した。「この最後の時期は植民地化の時代と名づけること」ができる。

以上の過程によって、われわれは「歴史的統合が原初の中核の拡大」でなく、むしろ、「既存の多くの社会集団を新しい機構へ再編成すること」だと理解できる。「原初の中核」は、「しだいに隷属させていく諸民族を飲み込み」もしなければ、また「それらの諸民族が統合前に持っていたそれぞれの生活集団の特徴を抹殺すること」もない。「ローマはガリアを征圧した」ことは、「ガリア人がローマとは異なる社会集団であると感じなくなったり、ローマ帝国と呼ばれる大きな均質的な塊の中に解消されるといったことを意味しない」。そうではなく、「ガリアとしての連帯は崩れることなく、ただ、より大きな全体の一部としてローマに組みこまれた」のである。「統合の原初の中核であるローマ自体」は、「巨大な機構のこれまた別の一部分」にしかすぎず、「ただ結集作用の主体」であるということで「有利な位置を占めた」のである⁶⁵。オルテガによれば、「低次の中核が集まって国家という高次の統一体が形成されたとき、低次の中核がもはや、はっきり区別された要素としては存在しなくなる」というようなことは起こらず、「征服、統一、統合ということは、それに関係した集団が、集団として本来持っている機能を失うこと」も意味しない。それゆえ、「各集団の中にある自立の力は、押し付けられてはいるものの、なおも生き続けている」のである。つまり、「集中化の力がその遠心力を抑制し、各集団がばらばらにでなく、全体の中の部分として生きるように仕向けている」のである。したがって、「国造りの女神である中心の力——ローマ帝国におけるローマ、スペインにおけるカスティージャ、フランスにおけるイール・ド・フランス——が少し弱まりさえすれば、合体していた集団が内蔵している分離化の力が、再び自動的に顔をのぞかせる」のである⁶⁶。オル

テガはローマの統合過程を辿ったあと、こうした「統合の過程を推進し、活力を与える真に実質的な力は、つねに国家の教義、つまり共同生活を呼び掛ける計画である」と主張する。つまり、「合体して一つの国家を形成している諸集団は、なにごとかをなすために共同生活を営んで」おり、それは「目的や願望や利益によって成立している共同体」であって、「彼らはただ一緒にいるということで共同生活をしているのではなく、共同で何かをなすために一緒に生活している」と言う。すなわち、「国家の存在にとって決定的なのは昨日や過去や伝統的遺産ではない」、「国家は明日への計画を持つことによって形成され、存在する」と彼は言明するのである。かくして、「ローマを取り巻いていた諸民族が征服されたとき」、彼ら諸民族は「武力によってというよりはむしろ、ある期待からローマという木に接ぎ木されたと感じて」おり、「ローマは、すべての者が協力して事を行なう一つの偉大なる生の事業の代名詞だった」のである。つまり「ローマそのものが、世界的規模の集団が指向していたもの」であったのである。「彼らにとってローマは、すぐれた法律制度の伝統、すばらしい行政組織、生にいっそうの華やかさを添えるギリシアから受け継いだかざかずの思想の宝、新しい祭礼とより楽しい娯楽のレパートリーを意味していた」のである。そして「ローマが種々の面で明日への目標でなくなった日に、ローマ帝国は分裂した」とオルテガは指摘するのである⁶⁷⁾。

以上のようにオルテガはモムゼンの「統合」という言葉をヒントに、ローマ史の統合の歴史を辿るのであるが、「一国の歴史は、単にその国の形成期、上昇期の歴史だけではない。それはまた、衰退期の歴史でもある」と指摘する。彼によれば「上昇期の歴史が、進行して行く統合の線を描いてみせることにあるな

ら、衰退期の歴史は、それとは逆の過程を描く」。「一国の衰退の歴史とは、広大な分裂の歴史」なのである。したがって「国家という統一体を生気のない共存としてではなく、ダイナミックな機構として理解することに慣れる必要がある」のである。オルテガによれば、「屋根が柱に加える圧力は、柱が屋根をささえようとする逆の力と同じように、建物にとっては本質的に必要なもの」であるように、「統一体の維持という面から見れば、分化の力も、集中化の力と同じ程度に本質的なもの」なのである。オルテガはこの統一と分化の力の関係を生理学の観点からも説明している。すなわち「疲労がまったく存在しない場合には器官が衰弱する」というのである。「器官がじゅうぶんな栄養をとるためには、その機能が刺激を受け、活動し、そして疲労する必要がある」のであり、「器官はそれを覚醒状態に保たせる小さな傷を、たえず受ける必要がある」のである。つまり「このような小さな傷」による『機能的刺激』がなければ、「有機体は機能を働かせることも、生き続けることもできない」とオルテガは言うのである。ここからオルテガは、「統一化の力、結集作用」が「衰弱しないためには、逆の力、つまり分離の力、各集団の中に生き続けている遠心的な衝動を必要とする」のであり、「このような刺激物がない場合には凝集力が弱まり、国家という統一体は崩壊し、各部分は分散して孤立し、再びそれぞれが独立した一つの全体として生きねばならなくなる」と主張しているのである⁶⁸⁾。それゆえオルテガの見るところ、「ローマ帝国の歴史もまた、大衆が指導的少数者を吸収してその力を失わしめ、それにとって代わった大衆の反逆と支配の歴史」なのであった⁶⁹⁾。

(2) ジュリアス・シーザー

こうした統合と分裂の古代ローマ帝国の歴

史過程において、その統合の立役者として、すなわち古代ローマの社会形成の模範的人物として立ち現れるジュリアス・シーザーをオルテガは、次のように高く評価している³⁹⁾。

オルテガは、「われわれはあらゆる国家の生成期のなかに、つねに一人の偉大な事業家のプロフィールを見る」ことができ、「民族の国家形成力は、その民族の持つ想像力に比例する」と言う。そのような偉大な人物として、「古代世界における最大の想像力の所有者」、「明晰なる頭脳の持ち主」たるジュリアス・シーザーを挙げる。シーザーは前述のローマ発展の諸段階の植民地時代・帝政期の最初に登場した偉大な軍人・政治家であった。

ところでオルテガの言う「真に明晰な頭脳の持ち主」とは、その明晰さをその対象自体の中に負っている、学問的次元や抽象的な事柄に対する明晰さを言うのではなく、「本質的に雑然とし」、「錯綜した」、「唯一無二の」、「具体的な」「生の現実のなかにあって正確に自分の進むべき道を知りうる者、生の全体状況が見せる混沌の背後に各瞬間の秘められた構造を透視しうる者」を指すのである。これに対して、「自分の生のなかで道に迷っている」者は、「現実の、彼らの生そのものが持つ本来の時を直視しまいとして思想を用い」、「その恐ろしい現実と対面するのがこわく、あらゆるものが明瞭に見える幻影の幕」、即ち「思想」で「その現実をおおい隠そうと努めている」。特に「自己の生と対決するのを恐れて科学に没頭している」「科学者の大部分」は、「明晰な頭脳の持ち主ではなく、「いかなる状況を前にしても愚鈍である」とオルテガは指摘する。「明晰なる頭脳の持ち主」とは、「そうした幻影的な『思想』をふり捨て、生を直視し、生にあってはいつさいの問題を含むことを認め、自己を迷える者と自覚する者」であり、「自己の真正なる現実を発見し

始め」、「その悲劇的で、切迫した、絶対的に誠実な——というのは、自分を救おうとしているのだから——まなざし」をもって、「生の混沌を秩序づけ」ようとする。オルテガは、これこそ「唯一の真実なる思想、つまり難破者の思想である」と言明する。そして「政治は科学よりもはるかに現実的である。なぜなら政治は、人間が好むと好まざるとにかかわらず、突然に投げ込まれた唯一無二の状況から成り立っているからである」。したがって「政治は、誰が明晰な頭脳の持ち主であり、誰が凡庸な頭脳の持ち主であるかを識別するのに最もよいテーマである」と述べている。

そして、シーザーこそは、「人類が経験したなかで最も混沌とした時代の一つにおいて、真の現実の輪郭を見いだす才能にかけて、われわれの知るかぎり最も偉大な例である」と言う。このシーザーは、征服の禁止と「元首」の必要性を政策とする共和主義者（保守主義者）に対して、「ローマ帝国が行ったかつての征服」という「活動的な運命をとことんまで受け入れ、今後も征服を続行する」ことを主張していた。シーザーが目論んでいたのは、「たんなる世界的王国」ではなく、「その周辺諸州によって生きるローマ帝国」、「都市国家の決定的な超克」、「この上なく多種多様な民族が協力し、すべての民族が連帯感を持ちうる一つの国家」、「すべての要素が、国家の受動的主体であると同時に能動的主体でもあるような巨大な社会構成体」、ローマの外に「世界民主主義の行政権および代表権」を持つ「君主政体」の創造であったのである⁴⁰⁾。

かくして、シーザーの豊かな洞察力・想像力によって古代ローマ帝国の原形が形成され5賢帝時代に代表される最盛期を迎えたあと、ローマ社会の分裂・衰退の時代を経て、ヨーロッパ中世が誕生してゆくのである。

IV おわりに

以上、筆者は貴族と大衆との相互作用の観点から、オルテガの社会観を、とくに模範性と従順のメカニズムによる社会形成を中心にして検討した。さらに、そうした社会観に基づくオルテガの歴史観を、統合と分裂、すなわち少数者・貴族によって統合されるキトラ期と反逆の大衆によって分裂されるカーリ期の交替の歴史過程に焦点を当てて、その具体例として古代ローマ史とその形成者シーザーを挙げて紹介した。こうしたオルテガの社会観・歴史観は今後の人類のあるべき社会と未来史に豊かな発想と示唆を与えてくれるのではなかろうか。

<註>

- (1) Ortega y Gasset, J.:La rebelión de las masas(1930), Obras Completas, Tomo IV , 148ss, 278, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、大衆の反逆、62以下、252、白水社、1969 : Giner, S.:Mass Society, 75-79, Martin Robertson, London, 1976 : 長谷川高生 : 大衆社会のゆくえ－オルテガ政治哲学 : 現代社会批判の視座－、9-19、ミネルヴァ書房、1996
- (2) Sánchez Cámara, I.: La teoría de la minoría selecta en el pensamiento de Ortega y Gasset, 79, Editorial Tecnos, Madrid, 1986:Osés Gorraiz, J.M.:La sociología en Ortega y Gasset, Editorial Anthropos, Barcelona, 1989
- (3) Ortega y Gasset, J.:España invertebrada(1921), Obras Completas, Tomo III , Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、無脊椎のスペイン、白水社、1969
- (4) Ibid., 98-99; 同上訳書、322
- (5) Ibid., 99; 同上訳書、322-323
- (6) Ibid., 94-95; 同上訳書、316-317
- (7) Ibid., 93; 同上訳書、314
- (8) Ibid., 98; 同上訳書、321
- (9) Ibid., 100; 同上訳書、324 : Ortega y Gasset, J.:Biología y Pedagogía(1920), Obras Completas, Tomo II, 273-306, Alianza Editorial, Madrid, 1983 : 西澤龍生訳、生物学と教育学、現代文明の沙漠にて、18-69、新泉社、1974 * このエッセイでオルテガは、「子供の特徴として現実の中にある悪や不快なものに対する生来の盲目、したがって、快く愛すべき部分だけを感じ取る」ということを示している。
- (10) Ibid., 101; 同上訳書、325-326
- (11) Ibid., 101; 同上訳書、326 * オルテガは「人体が鳥のように翼を持つことは、もしそれが可能ならば望ましいことだ。しかし動物学的構造からしてそれは無理だから、人間は翼を持つべきだと言うのは誤りだろう」と指摘している。
- (12) Ibid., 101; 同上訳書、326
- (13) Ibid., 100,101-102; 同上訳書、327
- (14) Ibid., 103; 同上訳書、328
- (15) op. cit., 150; 前掲訳書 大衆の反逆、64
- (16) op. cit., 103; 前掲訳書 無脊椎のスペイン、328
- (17) Ibid., 103-104; 同上訳書、329
- (18) Ibid., 104; 同上訳書、329-330
- (19) Ibid., 104-105; 同上訳書、330-331
- (20) Ibid., 105; 同上訳書、331
- (21) Ibid., 106; 同上訳書、331-332 * オルテガは「ときにはきわめて複雑で込み入った構造を持つ、その他すべての社会の形式も、凡俗だが健全な心を持った人びとが生得的に高貴な人のほうに引かれるというその傾向を前提としている」とも言っている。

- (22) Ibid., 106; 同上訳書、332-333
- (23) Ibid., 107; 同上訳書、333-334
- (24) Ibid., 106; 同上訳書、332-333
- (25) Ibid., 98; 同上訳書、321-322
- (26) Ortega y Gasset, J.: El tema de nuestro tiempo(1923), Obras Completas, Tomo III, 147, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 井上正訳、現代の課題、183-184、白水社、1970 *オルテガは「大衆とまったく異質的な個人は、大衆に対してなんらの影響をも及ぼしえないであろう。彼の仕事はその時代の社会体の表面を滑って通るだけで、なんらの反応をも誘発しえない。したがって歴史の一般的過程に入るところがないわけである。これは程度の差こそあれしばしば起こったことである」と言っている。
- (27) Ibid., 146; 同上訳書、183 *オルテガは「あらゆるものはあらゆるものに影響を与えよとか、あらゆるものはあらゆるものに依存するとかいう主張は、神秘主義のルーズな誇張であって、そういう誇張は事柄の内実を明白に見ようとする人から必ず反発されるだろう」と言う。
- (28) Ibid., 147; 同上訳書、184
- (29) Ibid., 147-148; 同上訳書、184-185: 長谷川高生: オルテガ世代論—歴史社会における時間性に関する一考察—、近畿医療福祉大学紀要、9(1)、25-46、2008 *オルテガは、「自然科学者が『変種』というこの術語に与えている厳密な意味」において、「世代は人間族の変種である」と言う。「一世代の構成員は、先立つ世代とは区別された一つの共通の顔つきを見せるという、ある象徴的な特徴を付与されて世界の中へ入ってくる」。同世代であれば、「賛同者と反対者の対立がいかににはげしいときでも、その背後に、態度の共通性のあることが容易に見いだされる。どちらも同時代の人間であるから、彼らの相違がいかに大きくても、彼ら相互の類似のほうがそれ以上にもっと大きいのである」。たとえば、「十九世紀の反動主義者と革命主義者との間には、彼らの誰かとわれわれの時代の誰かとの間にあるそれよりもはるかに多くの近似性があった」。
- (30) op. cit., 51; 前掲訳書 無脊椎のスペイン、257
- (31) Ibid., 51; 同上訳書、256
- (32) Ibid., 51; 同上訳書、257
- (33) Ibid., 52; 同上訳書、258; Ortega y Gasset, J.: El origen deportivo de Estado(1924), Obras Completas, Tomo II, 607-623, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 西澤龍生訳、国家のスポーツの起源、傍観者《エル・エスペクタドール》、311-330、筑摩書房、1973
- (34) Ibid., 52-53; 同上訳書、258 *オルテガは「種族の同一性は、一つの国家機構への合体の過程を促進し、容易にすることはあるが、種族の同一性それ自体が合体を伴うものではない」と言っている。
- (35) Ibid., 53; 同上訳書、259-260
- (36) Ibid., 53-54; 同上訳書、260
- (37) Ibid., 56, 56-57; 同上訳書、263-264、264-265
- (38) op. cit., 149; 前掲訳書 大衆の反逆、63
- (39) Ibid., 253ss; 同上訳書、213以下 *オルテガは「いわゆる明晰な頭脳と呼べる人物は、たぶん、古代世界全体を通じて二人しかいなかった。それはテミストクレスとシーザーで、ともに政治家である。一般に政治家というものが、著名な者も含めて、まさしく愚鈍なるがゆえに政治家でありうることを考えると、これは驚くべき事実である」と言っている。
- (40) Ibid., 252-258; 同上訳書、212-220: 長谷川

高生、オルテガの平和論－ヨーロッパ合衆
国による世界平和－、近畿医療福祉大学紀
要、12(1)、49-50、2011

